

コモンズの経済学

—豊かな自然と 関係性を求めて

人間社会の幸せを希求する経済学

経済学は、人々が豊かに暮らすことのできる社会をどう実現するか、を幅広く考えてきた学問です。今、自分の幸せを左右するものを思うままに描いてみてください。市場経済社会に生きる私たちは「お金」と即答しそうなものです。では、そのお金で手に入れることができ、あなたを幸せにする財やサービスはどのようにして作られているのでしょうか？最終的に行きつく先は自然ではないでしょうか。そうではなくとも、自然なくして生産しえないはずで、「そんなん、当たり前」という声が聞こえてきそうです。しかし、この百数十年ほどで、自然



三俣 学

【研究テーマ】

エコロジー経済学

コモンズ論

gmitsuma@mail.doshisha.ac.jp



が健全なものとしてあることが当たり前ではなくなったのです。そもそも経済学は、自然をどのように捉えてきたのでしょうか。「そんなん、当たり前」と思ったあなたと同じです。つまり、自然は対価を支払わず利用できるほど潤沢に存在する自由財（稀少でない）と捉えてきました。しかし、地下資源を利するようになった人間のもつ自然改変力は桁外れに大きくなり、生産・消費・廃棄のすべてにおいて、自然の持つ希少性は格段に高くなったのです。資源を提供してくれる自然も、廃熱や廃物を引き受け処理してくれる自然も豊潤にあって当然、という状況とはかけ離れた現実があるのです。

商品化される自然ーその過程で失う大切なもの

現代の経済は、自然を稀少化することで肥大化（「成長」）をとげてきました。たとえば、今、地域住民が共用で自給利用しているきれいな地下水があるとしましょう。その水の豊饒さに目をつけた企業がその井戸の源流部にある森を購入（私有化）し、少しでも多くの水を得られるように開発を進め、飲料水製造工場をつくり水の商品化を進めます。他方、住民たちが使ってきた井戸は枯れ、彼らはもはや自力で水を手に入できなくなり、スーパーやコンビニでボトル詰めされた水を購入しなければなりません。この水の商品化の過程を、私たちの幸せを示す指標の一つである GDP はどのように評価するのでしょうか。水源地の開発や飲料水工場の建設、工場労働者の雇用、飲料数の販売などにより GDP はぐんと



上昇するでしょう。自給的に水を得てきた住民たちは市場で飲料水を買うことになり、これもまた GDP を押し上げます。たとえ、源流開発による森林伐採や林地損傷、飲料水の大量くみあげによる生態系の攪乱が顕著であっても GDP は上昇します。そんな不都合な部分も含め GDP が増えさえすれば豊かになった、ということになります。経済学は市場において価格をもつものに特化して分析する強みを磨きあげてきた分、非市場経済の領域で潤沢に存在する自然の機能や価値、あるいはあえて市場化しないことで幸せを担保しておくような家族、友人、地域、市民的連携（NPO、NGO）などの諸関係のもつ機能や価値については十分に検討してきませんでした。

コモンズとしての自然 — 富の源泉として環境の豊饒さを守る

自然とそれに根差す農の営み、林の営み、漁の営みは、元来的に非商品化経済における自給的な営みでした。自給的な営みは、決定的ダメージを自然に与えるものではありません。それを支えてきたのは、日本では、エコロジーの再生産に適う入会（いりあい）と呼ばれる自然の共用・共有の仕組みです。自然の豊潤さを失わないように、つまり自然を稀少化させないように、利用者が協力しあってルールを作り、それにみながしたがいながら自然を守り利用してきたのです。そういった自然を直接日々の生活に役立てる自給利用は、石油革命、グローバルな農林業市場の展開によって衰弱しました。他方、大

型の重機、化学肥料など、石油の多投により効率化をはかってきた日本の農林水産業は、グローバル市場での激しい競争に挑み続けてきましたが、競争において劣位となり、低迷が続いています。結果、若者が流出した疲弊が進む農山村では、売れなくなったら「はいそれまで」とばかりに放置された人工林や耕作地が増加し続け問題化しています。自然の自給利用も、商業的利用も低迷する過程で、各地域の水土保全や農の再生産を保証してきたローカル・ルールやそれに基づく相互扶助・協働も衰弱しています。

このような時代をむかえた現在、「コモンズとしての自然」という捉えなおしが必要です。自然をあくなき私的利潤追求の対象と見るのではなく、自然の持つ多様な機能や価値を利用者みんなのものとして守っていこうとする考え方です。こういうことを考究してきたのがコモンズ論です。この分野の研究でエリノア・オストロムという人が、2009年、女性で初めてノーベル経済学賞を受賞したのですが、彼女らの膨大な研究の基礎には、日本の入会が持続可能なモデルとして位置づけられています。しかし、彼女らがとらえたのは江戸時代の入会で、そのまま現代へ応用できません。私は、この中世から現代を生き続けている伝統的な農山漁村に生き続ける入会にヒントを得ながら、現代社会により適合した形の「新しいコモンズ（共同や協働）」の生成をどのように実現しうるか、という問いを、フィールドワークと理論を往還しながら、明らかにしていきたいと思っています。